

念仏はただ我々が称えるだけであって、如来の廻向ということは現われない。如来廻向のお念仏である、如来廻向の大行である、ということをつらぬかせるために、第十七願諸仏称名の願を發されたのであります。それで「行巻」の初めに第十八願を掲げないで第十七願を掲げた。第十八願は行から信を開いたところの「信巻」に於て掲げまして、至心信樂の願、本願三信の願であるということを示されまして、選択本願の行の願、選択本願の信の願と、選択本願を行の願と信の願と二つに分けて、そして如来の本願力廻向ということをつらぬかせるというのが、浄土真宗の教法であります。親鸞聖人は第十七・十八願の二願を選択本願とされている。選択本願の行の願、選択本願の信の願という風に、「行巻」の「正信偈」の偈前の文のところに明らかにされているのであります。

（本稿は、昭和四十五年九月二十四日、大谷大学大学院における講義の筆録である。文責 小野蓮明）

## 回向と選択

回向と選択とは如来の衆生救済の本願の二大眼目である。この二要素は相依り相待ちて相成じ、本願力を成就完全せしめる。回向表現する内実本性は則ち選択摂取の仏の願心、即ち信受決定の衆生の信心であり、選択摂取せられたる所の外的行業は則ち回向表現の諸仏称讃の名号である。かくて超世大願の二大要素を標示する所の十七、十八の両願は、当然四十八願中の雙眼であらねばならぬ。しかるに古来親鸞研究者が、徒に選択の一面を偏重して、回向の他の一面を忘るゝのは悲しむべきことではないか。まことに選択の一面から云へば念仏往生の十八願こそは四十八願中の王本願たるに相違ないが、若し転じて回向表現の方面から云へば諸仏称名の十七願こそは王本願であらねばならぬ。

（曾我量深著『救済と自証』より）